

東日本大震災 | 連続ルポ2 | 仮すまいの姿

Great East Japan Earthquake | Serial Report 2 | Life in Temporary Housing — no.3

福島県の応急木造仮設住宅

Emergency Wooden Temporary-Housing in Fukushima

辺見美津男

Mitsuo Henmi

—

阿部直人

Naoto Abe

—

三瓶一壽

Katsutoshi Sanpei

—

日本建築家協会東北支部福島地域会会長／1954年福島県生まれ。1976年日本大学工学部建築学科卒業。1977～1991年白河市役所勤務。1991年(有)辺見美津男設計室設立。2008年「作楽」で日本建築家協会優秀建築200選入賞、2009年「小谷田邸(子育て世代の家)」で第19回ふくしま住宅コンクール最優秀賞、「白河南中学校」で日本建築家協会優秀建築200選入賞、2010年「作楽」で第29回福島県建築文化賞優秀賞受賞ほか

日本建築家協会東北支部福島地域会副会長／1956年福島県生まれ。1978年法政大学工学部建築学科卒業。1989年阿部直人建築研究所設立。「くに屋」で、第16回福島県建築文化賞特別部門賞・郡山市さわやか建築賞優秀賞、「福島県消防学校」で平成19年度福島県建築文化賞優秀賞、「郡山市三穂田中学校体育館」で平成19年度福島県建築文化賞特別部門賞・平成18年度郡山市さわやか建築文化賞奨励賞受賞ほか

日本建築家協会会員福島地域会所属／1956年生まれ。日本大学工学部卒業。建築意匠設計・監理。2003年「三春町市街地整備基本計画」でHOPE賞受賞。「三春駅前集会所」「三春北保育所」コンペ入選。多くの寺院建築を手がける。東日本大震災による仮設住宅建設支援において2011年HOPE賞活動部門表彰

福島県から仮設住宅が変わるきっかけを

JIA福島地域会は、福島県応急木造仮設住宅建設を支援して具体的な活動を展開してきた。頼まれもしない押しかけ女房的な取組みである。それは「被災者のために少しでもよい居住環境を」「フクシマから仮設住宅の概念を変える」という理念が突き動かしたものだ。

取組みは、建設地の突然の変更や決定に、まったなしの対応が求められ、走りながらの作業の連続だった。本業そっちのけの取組みに会員から悲痛なメールが届くときもあった。そうした私たちの真摯な取組みは、徐々に県からも建設業者からも信頼を得て、連携を深めていくことができた。その連携のなかから、配置計画等に少しずつ改良が加えられて進化を遂げていった。振り返りもせずただひたすら無我夢中で、建築家の職能を災害と向き合わせ突き進んできた数カ月であった。被災者が人生を取り戻すために、木造仮設住宅が大きな力には決してならないかもしれないが、それでも福島県から仮設住宅が大きく変わるきっかけがつけられたのではないと思う。

大震災からまもなく1年が過ぎ、福島県の仮設住宅建設はおおかた整ったようである。街なかでは、師走の動きも見え始めているが、福島県は時間の経過とともに、混乱がますます深まってきている。「戻りたくても戻れない状態がいつまで続くのか」「仮設の期限はいつまでか」というような、仮設から復興への道のりは、先の見えない困難で遠いものに感じられる。

私たちは、復興支援活動として、これらの取組みを整理

しながら、そこから得た知識を活かし、木造仮設住宅が仮設から復興への中間的役割を担うことの可能性を探りたいと考えている。(辺見)

仮設住宅の配置計画に建築家がかかわることの意義と必要性

「避難している多くの人に早く住居を提供する」。これが仮設住宅に求められる大きな使命であるが、敷地に多くの人を押し込めようとすれば、そこは高密度で等間隔に整然と並ぶ兵舎のような施設になってしまう。私たちは要求された戸数の調整をしながらも、次のようなことに気を配った。

①1棟の戸数をあまり多くせず、棟間隔に変化を付けてずらし溜まりをつくったり、畑や花を植えられるスペースを設けるなど、自発的なコミュニケーションが生まれる自由な空間を残した。

②玄関を向かい合わせにすることで、通常のまちのように通りや庭が生まれ、パブリックとプライバシーが形成される。たとえ完全な向かい合わせでなくとも、掃き出し窓やテラスを設けることでそこに人々の集える関係ができ、過去の震災で問題となった孤独死を防ぐためにもこの配置は必要なことである。これらの配置計画は、どの部屋が居間や茶の間になるのかということと密接に関連しているため、平面プランとセットで考えなければならないのは言うまでもない。

③自治体から提供される敷地の特性によっても住環境は大きく変わる。例えば、あくまでも南北にこだわるのか、

それとも見える風景を大事にするのか。また、市民公園が敷地になったケースでは緩やかにカーブする園路をそのまま住棟間の通路にし、植えられている樹木を切らないという条件がとても豊かな住環境をつくるきっかけになった。

福島県も走りながら変化していき、その後仮設住宅の敷地内につくるデイサービス機能を備えた高齢者サポートセンターの公募を行った。いくつかの敷地にグループホームがつくられ、コンビニが入り、残念ながら実現はしなかったが、いわき湯本の温泉が引かれた敷地では

スーパー銭湯の話も持ち上がった。このように、仮設とはいえ何年も生活することを考えれば、普通のまちをつくるように計画しなければ人は暮らせない。そのとき建築家の能力が要求されることになる。(阿部)

福島県応急仮設住宅建設、三春での取り組み

東日本大震災および福島第一原子力発電所の爆発事故による被災者のための応急仮設住宅建設に際して、JIA福島地域会が木造仮設住宅建設の技術支援にかかわった多くの団地のひとつに、三春町に建設された100戸(4団地)がある。この仮設住宅はほぼ全面的にJIA福島の技術提案に基づき建設されたものだが、主な取り組みと実現成果は次のとおりである。

第一の成果は、地元中小工務店5社が協同して建設にあたったことである。今までの応急仮設住宅建設のほとんどが中央の大手事業者の手により供給されていたが、今回われわれの働きかけで参集した町内の工務店により「三春町復興住宅をつくる会」を組織して今般の事業に応募してもらい、100戸の木造仮設住宅供給が実現できた。これらが実現できた要因としては、三春町で昭和58年よりHOPE計画に合わせて「三春町住宅研究会」を組織し活動をしてきた実績によるものとする。また、各社が地元のプロフェッショナルとしての誇りを持って、半端な仕事はできない、メンテナンスに対してもきめ細かな対応をしたいと考えていることである。

第二は、地元材である杉材を主とした材木(福島県産材100%)でつくることができたことが挙げられる。このような大きな災害が発生すると、被災地、被災者はどうしても終始受け身の立場になりがちだが、後の復興を考えたときに、極力被災地での労働の機会をつくることや物流の回復等、当事者の生きる喜びや活力を回復させることも重要である。

第三には、コンクリート基礎、無垢杉材の多用、外断熱工法、開口部断熱サッシの採用など、仮設住宅でありながらも居住性能は現在の省エネ住宅に引けを取らない性能を目指してつくられていることである。そこには、被災者が癒され、一刻も早く復興に向かい歩み出してもらいたいという思いがある。

第四には、各団地の構成がコミュニティ単位での団地入居を配慮していることである。被災者側、受け入れ側双方の初期段階の行政間協議と配置計画上の工夫の結果、コンパクトな団地構成で玄関向かい合わせなど、入居者にとって開かれた、井戸端会議ならぬ陽だまり会議など、コミュニケーションの取りやすい配置計画となっている。(三瓶)



図1 | 三春町仮設住宅



図2 | 周辺風景と溶け込む木造仮設住宅



図3 | 白河市木造仮設住宅



図4 | 木造仮設住宅キッチンを見る



図5 | 木造仮設住宅の断熱仕様例



図6 | 木造仮設住宅リビングを見る



図7 | 仮設住宅イメージパース